同志社大学国文学会彙報

昭和五十年度国文学会役員

会長　土橋　寛
常任委員　南波　浩　安永　武人
松下　貞三　玉村　文郎
黒沢　幸三　谷口　広之
沢田　武男　和田　融
瀬戸　修　渡辺　一
天羽　淑子　大北　正明
評議員　二十八名
会計監査　宮下　隆夫　広田　収

昭和五十年度国文学会活動状況

〈国語教育研究会（六月二十九日・勤労会館）〉

俳句の授業　壬生　博幸（平安女学院中学校）

戦争教材の取り扱いについて　新保　昭夫（大阪府立枚方高校）

〈教育問題懇談会（八月一日・教育文化センター）〉

生活指導の問題点　松島　繁行（泉ケ丘中学校）

現代国語の評価について　徳永光次郎（桃山学院高校）

〈総会・研究発表会（十一月二十三日・教育文化センター）〉

天真名井の伝承　西原　啓子（大学院生）

〈国文学会講演会（十二月十一日）〉

藤村の『家』を中心に
——芸術と実生活——　十川　信介氏

昭和四十九年度卒業論文題目

〈日本文学古代前期〉

柿本人麻呂　伊藤　直美

大伴旅人論
——讃酒歌を中心として——　河原林映子

山上憶良論　児島　裕子

持統女帝論　正岡淳子
額田王論　町田依子
トゥバラーマの研究　宮城やよい
人麻呂の天皇観　澤田真知子
異郷論
——常世と神仙思想を中心に——　沢田武男
自然詠から叙景歌へ　塩田優子
枕詞について　中田員子
挽歌の成立　谷口とも子
神々の基盤
——事代主神の問題をめぐって——　巽康真
道行きの変遷　鶴原多鶴子
柿本人麻呂の挽歌　土谷頼子
柿本人麻呂
——大宝二年頃以後を中心に——　上西昭
古代日本人の自然観
——柿本人麻呂を中心に——　山口洋子
山上憶良と唐
——憶良の滞唐での成果——　吉田佐智子
詩の発生
——呪詞的言語の消息をめぐって——　上久保孝史
東歌の性格　田中博
「神語」叙説　神山孝一

〈日本文学古代後期〉

伊勢物語の増益章段　段上修二
清少納言　枕草子　本池秀子
紫式部の人間性
——「紫式部集」を中心に——　中村孝子
紫式部の厭世的心情についての一考察　長尾由紀子
紫式部
——身と心の問題について——　南条繁子
「紫式部日記」の文学的達成　関とよ子
平中物語論
——その「色好み」と「笑い」をめぐって——　島田周子
竹取物語論　菅原武
紀貫之論　時里二郎
「提中納言物語」各篇の成立について　鶴田純
「紫式部集」に見る紫式部の内面的世界　安原啓子
紫式部の人間像

——性格の変貌と生への姿勢——　矢島淳子
須磨・明石巻の世界　柳本純子
紫式部の人間像
——その宿世観——　山本清子
〈日本文学中世〉
平家物語の方法　藤原則幸
方丈記について　村田敬
徒然草の文学性　高橋雅代
平家物語における歴史叙述の方法とその構想
——鹿谷事件を通して——　谷口広之
「平家物語」形成における表現と抒情・一断面
——「足摺」説話の表現展開を通して——　田阪義英
「卒都婆小町」論　寺島浩
曽我謡曲について
——その民衆志向——　富田淳子
中世軍記物語における歴史と文学
——将門記の課題と平家物語の構想——　柳田洋一郎
「平家物語」維盛像をめぐって　金子彰
平家物語における維盛と宗盛
——その死をめぐって——　小林正幸
〈日本文学近世〉
芭蕉の旅　堀野孝子
「好色一代女」
——好色について——　今井由美子
好色五人女
——西鶴の求めた人間像——　井筒裕子
「笈の小文」研究
——未定稿説をめぐって——　加藤桂子
近松世話浄瑠璃覚え書き
——世のまがひものからの忠告——　加藤公子
雨月物語考　木富真理子
「好色五人女」　武藤よし子
「日本永代蔵」論　大浦弘子
蕉風確立以前の芭蕉について　園田恵理子
「曽根崎心中」論　山田和人
芭蕉に於ける西行についての考察　宮崎徳子
近松世話浄るり視言物論の前提
——「主題の分裂」に内在するもの——　宇野康彦
〈日本文学近代・現代〉

「島木健作論」　萩野良和
芥川龍之介論
——私小説への傾斜について——　藤田栄子
芥川龍之介試論
——作家的出発における虚構の意味——　池田哲郎
萩原朔太郎「月に吠える」について　犬塚治憲
有島武郎論
——「或る女」の一考察——　入江美也子
北村透谷小論　板山修
福永武彦論　市川佳子
永井荷風論
——新帰朝者の時代——　葛原万利子
晩年の漱石
——「道草」を中心に——　前原充
太宰治〈中期〉論　盛美登利
夏目漱石と「こころ」　村上林造
中島敦論　中井三千夫
「或の女のグリンプス」から「或る女」へ
——有島武郎の自由像の変遷——　西畑三千代
「浮雲」について　野里好啓
小林多喜二論　奥畑司
いぬい　とみこのファンタジー　高村むつ子
素顔と仮面
——三島由紀夫におけるロマン主義と古典主義——　高柳誠
中原中也　徳永泰男
童話作家　新美南吉　富永美紀子
太宰治の文学　吉岡美智子
黒島伝治論
——農民文学について——　東隆味
小林秀雄ノート　金地元
「夢十夜」論
——生と死と幻想と——　宮尾泰輝
三島由紀夫論　中村貴志
山川方夫　小野紀枝
新美南吉論　流石明子
「行人」と漱石　田原実
晩年の石川啄木　藤村逸枝
「我等の一団と彼」私論　熊谷美津子
埴谷雄高論

——その思想と文学——　原　孝義
漱石文学とリアリズム　大浦賢太郎
中原中也の歌　加藤正二
宮沢賢治試論
1「オッペルと象」・「カイロ団長」における思想について——　石津　隆

〈国語学〉
幸田　文の文体　萩原淳子
川端康成の文体について　服部みどり
現代の待遇表現　藤本順子
萩原朔太郎の詩の文体　井上玲子
京言葉の敬語　松本晴美
備中方言の歴史的考察
——草木を主として——　水川玲子
蒙求抄における複合語の研究　野口裕子
「動詞＋補助動詞」七種の意味
——アスペクトとテンスをめぐって——　高橋由美子

昭和四十九年度修士論文題目

紫式部成立考
——紫式部日記との関係について——　上田記子
平家物語諸本における一考察
——女院関係記事の定位——　三島信子
天孫降臨神話の一研究　吉野政治

編集後記

間もなく梅もふくらむことだろうが、第十一号をみなさんの手もとにおとどけできるのは嬉しい限りである。どうか『同志社国文学』が会員諸子の心の結び目であってほしい。そしてみんなの研究や願望が発表される場であってほしい。

山鹿素行のことばに「凡そ物必ず十年に変ずる物なり」とあるそうである。たしかに十年という歳月は個人においても重みを持っている。われわれの『同志社国文学』もそろそろ内からの変革が必要なのではあるまいか。それをべつなことばでいうと、若き執筆者の出現と、清新な方法論の展開である。一時代の作品に限られることなく、特定の分野に執することなく、各方面から生気溢れる研究が続出することを祈りたい。

経済危機の叫ばれている時期ではあるが、今冬も温暖な日が続いている。この春巣立ち行く学生も、また職場や家庭にて活躍している卒業生諸君も、どうぞ本誌に声援と批評を寄せられんことを……。

（黒沢幸三）